第二十一講・古典

1、古典とは

古い時代に書かれ今に伝えられる、すぐれた作品のこと。日本で書かれたものを古文、中国で書かれたもの（またはそれをまねて日本で書かれたもの）を漢文という。

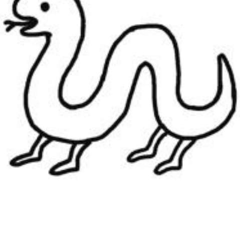
2、古典作品を知ろう

① 古文―枕草子（まくらのそうし）（清少納言（せいしょうなごん））

「枕草子」は、今から千年ほど前の平安時代に、清少納言によって書かれた随筆（ずいひつ）。宮中でのできごとや自然について思うことなどが、作者の独自の感性でつづられている。

② 漢文―蛇足（だそく）

この漢文は、「蛇足」という故事成語のもととなった話である。「蛇足」は、余計なものやむだな行いを意味する。



©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

一題目　次の古文と意味を読んで、あとの問いに答えなさい。

【古文】

春はあけぼの。やうやう（ようよう）白くなりゆく山ぎは（わ）、すこしあかりて、紫（むらさき）だちたる雲のほそくたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり、やみもなほ（お）、蛍（ほたる）の多く飛びちがひ（い）たる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもを（お）かし。雨など降（ふ）るもを（お）かし。

秋は夕暮（ぐ）れ。夕日のさして山の端（は）いと近（ちか）う（ちこう）なりたるに、烏（からす）の寝（ね）どころへ行くとて、三（み）つ四（よ）つ、二つ三つなど、飛びいそぐさへ（え）あは（わ）れなり。まいて雁（かり）などのつらねたるが、いと小さく見ゆるはいとを（お）かし。日入りはてて、風の音、虫の音（ね）など、はたいふ（う）べきにあらず。

冬はつとめて。雪の降りたるはいふ（う）べきにもあらず、霜（しも）のいと白きも、またさらでもいと寒きに、火など急ぎおこして、炭（すみ）もて渡（わた）るもいとつきづきし。昼になりて、ぬるくゆるびもていけば、火桶（ひをけ）（お）の火も白き灰（はひ）（い）がちになりてわろし。

〈清少納言（せいしょうなごん）「枕草子（まくらのそうし）」より〉

【意味】

春は夜明けがよい。だんだん白くなっていく山ぎわの空が、少し明るくなって、紫がかった雲が細くたなびいているのがよい。

夏は夜がよい。月の出ているころは言うまでもなく、やみ夜でもやはり、蛍が多く飛びかっているのはよいものだ。また、ほんの一つ二つと、かすかに光りながら飛んでいくのもおもむきがある。雨などが降っているのもおもむきがある。

秋は夕暮れがよい。夕日が照って山のはしにたいそう近づくころ、からすがねぐらへ帰ろうとして、

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

三つ四つ、二つ三つと、せわしく飛んでいくのさえも、心がひかれる。まして雁などが連なって飛んでいくのが、大変小さく見えるのは、とても風情（ふぜい）がある。日がしずんでしまってから、風の音や虫の音が聞こえるのは、また言うまでもなくおもむきがある。

　冬は早朝がよい。雪の降った朝は言うまでもなくすばらしい。霜が真っ白く降りているのもよい。また、そうでなくてもたいそう寒い朝に、火を急いでおこして、炭を部屋へ持ち運ぶのも、冬の朝にとても似つかわしくてよい。昼になって寒さがゆるんでいくと、火ばちの火も白い灰ばかりになっていって、みっともない。

---

(1) 作者がよいと思っている時間帯を、季節ごとに【意味】の文中からぬき出しなさい。

春 □　夏 □

秋 □　冬 □

(2) 作者があまりよく思っていないのは、冬のどのようなことですか。次の文の□にあてはまる言葉を、【意味】の文中からぬき出しなさい。

昼になって寒さが□□□□いくと、
火ばちの火も□□□□□□に
なって□□□□□□こと。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

二題目　次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

【漢文】

＊楚（そ）に祠（まつ）る者あり。その舎人（しやじん）に卮酒（ししゆ）を賜（たま）ふ。舎人相謂（あひい）ひて曰（い）はく、「数人これを飲まば足らず、一人これを飲まば余りあり。請（こ）ふ地に畫（ゑが）きて蛇（へび）を成し、まづ成る者酒を飲まん。」と。一人の蛇まづ成る。酒を引きてまさに飲まんとす。すなはち左手に卮を持ち、右手に蛇を畫きて曰はく、「われよくこれが足をなさん。」と。いまだ成らざるに、一人の蛇成る。その卮を奪（うば）ひて曰はく、「蛇はもとより足無し。子（し）いづくんぞよくこれが足をなさん。」と。つひにその酒を飲む。蛇の足をなす者、つひにその酒を亡（うしな）へり。

〈劉向（りゅうきょう）「戦国策」より〉

＊楚＝昔の中国の国名。

楚の国に、祭りを行う人がいた。その人が召使（めしつかい）に①杯（さかずき）に入った酒をあたえた。すると召使たちは相談して、「数人でこれを飲んだら足りないが、一人で飲めば十分すぎるほどある。地面に蛇の絵をかき、最初にかき上げた者がこの酒を飲むことにしよう。」と言った。一人の蛇がまずできあがり、酒を引き寄せ飲もうとした。そして、左手に杯を持ち、右手で蛇をかきながら、「わたしはこの蛇に足をかくことだってできる。」と言った。その足がかき上がらないうちに、もう一人の蛇ができあがった。そして杯をうばい、「蛇にはもともと足はない。あなたはどうしてありもしない蛇の足をかくことができるのだ。」と言った。蛇に足をかいた者は、②とうとう酒を飲むことはできなかった。

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

(1)　――線①「杯に入った酒」は、どのくらいの量でしたか。次の文の□にあてはまる言葉を、文中からぬき出しなさい。

□□で飲むには少ないが、□□で飲むなら十分な量。

(2)　――線②「とうとう酒を飲むことはできなかった」とありますが、それはなぜですか。文中の言葉を使って答えなさい。

□

(3)　この話から生まれた「蛇足（だそく）」という故事成語の意味を表している絵として正しいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア

イ

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ウ

エ

©RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十一講・確認テスト

次の傍線部の品詞として、正しいものを選びなさい。（活用されているものもあります。）

1　のんきな
ア　名詞　　イ　動詞
ウ　形容詞　　エ　形容動詞

2　走る
ア　名詞　　イ　動詞
ウ　形容詞　　エ　形容動詞

3　早く
ア　名詞　　イ　動詞
ウ　形容詞　　エ　形容動詞

4　一時
ア　名詞　　イ　動詞
ウ　形容詞　　エ　形容動詞

5　起きて
ア　名詞　　イ　動詞
ウ　形容詞　　エ　形容動詞

ⒸRECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第二十一講　古典

一題目

(1) 春…夜明け
夏…夜
秋…夕暮れ
冬…早朝

(2) ゆるんで・白い灰ばかり・みっともない

二題目

(1) 数人・一人

(2) (例)蛇には足がないのに、足をかいてしまったから。

(3) ア

〈確認テストの解答〉

1 エ　2 イ　3 ウ　4 ア　5 イ